

## 1. テキスト

「内部知覚について」109頁9行目から111頁7行目まで

## 2. テキスト要約

ここで西田は、カントの認識論に対するアリストテレスの存在論的基礎づけに関して思考を進めていく。

まず、カントの認識論において、主観が物自体 (Ding an sich) を認識することは不可能であるが、現象 (Erscheinung) について認識することは可能であるとされる。つまり、現象は主観における先天的 (ア・プリオリ: a priori) な認識形式によって認識可能となるということである。多様な現象に対して、感性が備えている先天的な認識形式である時間・空間を、又は悟性が備えている同様の形式である因果律などの純粹悟性概念 (reine Verstandsbegriffe, 範疇 (カテゴリー): Kategorie) を当てはめることによって、一定の認識可能な対象に統合するのである。

一方、アリストテレスの存在論において、「主語となつて述語となるなき本體」とは、具体的個物 (以下、「個物」という。) のことであり、優先的な実在性を有しているとされる。個物は形相と質料の結合体であるが、そのうち形相が可能態から現実態へ、現実態から可能態へと高次なる現実態を志向する運動が繰り返されるとき、その結果、最も高次な形相、即ち第一形相 (イデア: ἰδέα) に至るのである。この形相は、質料と結合しない「純なる形相」であつて、アリストテレスによれば神 (テオス: θεός) として真の実在性を有するのである。

そして、西田は、カントの認識論における認識可能な対象を「経験的實在」とし、アリストテレスの存在論における最も高次な形相を「理念的實在」とする場合、前者の后者からの基礎づけについて措定するのである。

ところで、神の存在証明中、存在論的証明 (「本體論的証明」とは、神は最も完全なるものであるということ根拠に、神の実在性を証明しようとするものである。また、アリストテレスの存在論は、優先的な実在性を有する個物が最も高次な形相、つまり神に至るとしている。この両存在論における最も完全な神と最も高次な形相とは通底している。つまり、事物の存在とは即ち理念である、と。

よつて、西田は、カントのいう純粹統覚 (我思惟す) による認識主観を「純なる形相の形相として唯一の本體」であるとする、つまり真の実体であるとしている。純粹統覚において質料は構成要素と含まれておらず、更に第一形相において質料は構成体であること否定されていく。つまり、質料が無であるという事象を共有することで、同相であること、よつて両概念につき接続が可能となる。そして、これらの接続的総合によつて、純粹統覚における認識可能な対象が、第一形相の動態的運動、つまり質料の否定を質料の肯定へと転移させる運動により、個物の生成を可能にするのである。

次に西田は、アリストテレス、カント及びショーペンハウアーの個物に関する定義を例示した後、個物の成立要件について考察を進めていく。

我々の五感、すなわち感覚によつて、物体は形相と質料により構成された実体として受容される。また、トマス・アクィナスの個体化の原理に従い、物体は質料により個物となるのである。

例として、鉄や銅という材料が異なる同形の球体 (鉄球・銅球) が示され、質料を異にするが、形相を同じくする物体について、両者が各別に個物となることにより、優先的な実在性を有することについて考察がなされる。

個物とは、物体の差異性によつて優先的な実在性を有する物体、つまり実体であるとするとき、形相について、鉄球・銅球は同形の球体であるので、幾何学的性質に差異はなく、よつて、両者の形相は実体ではないということになる。

しかし、質料について、鉄球・銅球は異なる材料であるので、物理的性質に差異があるにもかかわらず、西田は、この差異は「主語となつて述語となることなき基體」として機能するのみで、物理的性質の差異をもつて、両者の質料は実体であるということとはできないとしている。

そして、両者の質料が実体であるということが出来るためには、「形相に対して真に質料と稱するべきものは、その特殊化の原理でなければならぬ。」とし、この原理を必要な条件としている。

この「特殊化の原理」とは、一般の中に包摂される特殊に基づく原理ではない。非合理 (直観) 的なものを、合理 (悟性) 化させたものを「真の基體」とする原理のことである。

「真の基體」は「判断の述語」ではなく、「判断の述語」に対する「主語」となるもので、判断が不可、あるいは中止されている。

よつて、「真の基體」は、判断が不可・中止の状態にあるので、不可知的あるいは無と考えることが可能となる (可能性) が、この状態にあつて、可知的あるいは有と考えることが必然となる (必然性) とときに、すなわち、可能性から必然性へと様相の転移が行われる。西田はこの時に「真の個體即ち本體の考が成立するのである。」と言っている。

## 3. 哲学的問い

三木清は、『西田先生のことども』(1941)において、「先生の哲学は単なる非合理主義でないと同様、単なる直観主義でもない」と書いている。これを踏まえたとき、『善の研究』(1911)における「純粹経験」とは、どのような概念であると考えられるべきであろうか。